

■ ジョウゼフ・コンラッド協会(英国) 第37回年次大会

2011年7月7日(木)から9日(土)までの3日間、好天に恵まれ、オリンピックの準備に沸くロンドンで、英国ジョウゼフ・コンラッド協会(The Joseph Conrad Society, UK)の年次大会が催された。最初の二日間は、ロンドン西郊のRavenscourtにあるThe Polish Social and Cultural Association(POSK)で研究発表とパネル・ディスカッションが、最終日は、MayfairのThe University Women's Clubで研究発表と講演が行われた。

参加者は57名で、発表者には、著名な学者から大学院生まで、さまざまなレベルのコンラッド研究者が含まれ、また、取り上げられた作品も、*Almayer's Folly*, "The Idiots," *Lord Jim* (2), "Youth," "Heart of Darkness" (3), "The End of the Tether," "Typhoon" (2), *The Secret Agent* (6), *Under Western Eyes* (3), "Prince Roman," *Victory*, "The Secret Sharer," "The Shadow Line" (2)など広範囲にわたった。

一方、発表者の出身国は、英米やカナダなどの英語圏の国々のほか、欧州ではギリシャやアルメニア、中東ではエジプトやトルコ、また、アジアでは日本や香港など、10ヵ国近くに上った。日本からは、岩清水由美子氏と奥田が発表者として参加し、岩清水氏が、"The Idolization of Women in *Under Western Eyes*"という題でジェンダー論的視点から、また、奥田が、"Typhoon": An Eastern Perspective"という題で東洋的視点から発表を行った。

初日の発表のうち印象に残ったもののひとつに、第2部会"Marlow Tales"中の"Out of Our Depth: Frame Narration and Physical Space in *Lord Jim*"があった。発表者は学部を卒業したばかりで発表者中最年少者であったにもかかわらず、その落ち着いた話しぶりに感銘を受けた。また、この日の第3部会の"*The Secret Agent* and Anarchist Fiction"中では、*The Secret Agent*がもつぱら"popular fiction"の視点から論じられていたのが興味深かった。

二日目の第1部会"*Under Western Eyes*"中では、岩清水氏のほかにも、ギリシャ人発表者が、この作品のギリシャ哲学における不条理との関係などを指摘し、また、ロシア系カナダ人の発表者は、ロシアにおけるコンラッドの翻訳と研究を歴史的背景との関係から解説した。

パネル・ディスカッションは、近年におけるオペラや劇画などポピュラ

一・カルチャー分野へのコンラッドの影響の拡大を反映して、パネリストには、映画雑誌編集者の David Miller 氏、*Lord Jim* をモデルにした長編小説 *How to Survive the Titanic, or The Sinking of J. Bruce Ismay* (2011 Harper) の作家 Frances Wilson 氏、“‘Heart of Darkness’: A Graphic Novel” (2010 SelfMadeHero) の幻想的なイラストを描いた Catherine Anyango 氏、およびイースト・アングリア大学のアメリカ文学教授でテレビ・タレントの Sarah Churchwell 氏の 4 名が招かれ、活発な議論が展開された。

最終日の 第 2 部会“Print and Translation”中で興味を引いた発表は、ネットを利用して作家の読書歴を検討する研究方法(The Reading Experience Database <http://www.open.ac.uk/Arts/RED/>)であった。いずれコンラッド研究においてもネットの利用が不可欠になるであろうことを予感させられた。

学会の最後を飾るフィリップ J. コンラッド記念講演では、コンラッド学者として名高いサセックス大学の Cedric Watts 氏が、“‘Heart of Darkness’: The Political, the Aesthetic, and the Judgement of Judgement”という題で、政治的、美学的基準をはじめとした、文学研究におけるさまざまな批評基準を、主に“Heart of Darkness”を例に検討し、作品を客観的かつ包括的に批評することの重要性と難しさを示唆した

約 10 年ぶりに英国ジョウゼフ・コンラッド協会の年次大会に出席して、最も強く意識させられた変化の兆しは、参加者の世代と出身国の広がり、そして研究方法の多様性であった。

一週間、授業を休講にして海外出張したが、発表者の英語をおおむね聴き取ることができるようになるまでにまる一日かかった。私自身の聴き取り能力が低下している上に、英語圏以外の発表者が増え、それぞれのお国訛りの英語による発表が増えたからであろう。

最後に、このような比較的小規模な国際大会に参加する醍醐味のひとつは、昼食や懇親会の席で、国籍を問わず、優れたコンラッド学者と個人的に接し、論文上には表れない研究上の苦労話を聞き、また、彼らがふだんからいかに感性を磨いているかを、そのさりげない言葉や仕草に垣間見ることではないかと思う。今回も幸いと何度かそのような機会に恵まれ、コンラッド研究者としての自覚を新たにして帰国することができた。

— 奥田洋子